AJWCEF

NEWSLETTER 2011 年 4 月
Vol. 3

AJWCEF をご支援いただいております皆様へ
理事長 水野哲男

皆様におかれましては平素よりオーストラリア日本野生動物保護教育財団の活動にご理解とご協力を賜り誠にありがとうございます。昨年を振り返りますと、8 月にはオーストラリア連邦政府より豪日交流基金を経て財団の活動に助成金をいただくことができ、10 月には、本財団の初めての経験である国際会議（生物多様性条約締約国会議、COP10：愛知県名古屋市で開催）への参加を果たし、それを機会に国際連合傘下の生物多様性条約事務局へも登録されました。また、財団の大切な活動のひとつであります野生動物保護に関する教育活動に関しましても、COP10 では本会議サイドイベントでの発表のみならず、ブース出展や市民フォーラムの開催を行い、より広く一般の皆様に財団活動をお知らせすることが出来ました。さらに、日本においていくつかの大学を訪問させていただき、オーストラリア野生動物の現状とその保護などに関しセミナーを開催してまいりました。時には 100 人近い学生の方々に参加していただき、次代を担う若い方々とお話できましたことは誠に有意義なことでした。

AJWCEF は現在二つのプロジェクト進めております。一つは海外の動物園などに送られているオーストラリアの動物たちの健全な遺伝子の多様性維持のための国際的人工授精ネットワークと遺伝子バンクの確立、もう一つは病気や傷ついて野生動物病院に入院中の野生のコアラなどの餌の確保のためのユーカリ植林活動です。前者はオーストラリアと日本の大学や動物園などと協力し共同研究プロジェクトとして進める予定です。また、ユーカリ植林活動はオーストラリアの地域の学校の校庭を活用し、学生への環境教育と同時に進めております。このような活動を継続していくためには皆様のご協力が不可欠です。この場をお借りいたしまして、2010年度にいただきました皆様のご支援に対し深く御礼申し上げますと共に、今後ともさらなるご支援の程よろしくお願い申し上げます。

COP10 ブース参加

植林活動

Australian Government

豪日交流基金
Australia-Japan FOUNDATION

COP10 活動レポート

本会議サイドイベント

COP10開催期間中10月22日（金）、名古屋国際会議場にて『オーストラリアにおける生物多様性の保全—マクロとミクロの観点から』をテーマに、会議参加者のみを対象とした専門的な発表を行いました。Steve Johnston博士とJosephine Kelman博士が参加し、「野生動物の遺伝子多様性維持のための新しい試み-コアラの国際的人工授精ネットワーク設立構想」と「生物多様性保全と保護地域の管理-オーストラリアの例から」をお話していただきました。

ステージショー（生物多様性交流フェアー）

10 月 23 日（土）、オーストラリアの野生動物について多くの人に知ってもらうべく、“オーストラリアの野生動物クイズ～ユーカリの森の仲間たち～”をテーマに発表を行いました。コアラなど日本でもよく知られている動物がいる一方で、あまり知名度の高くない珍しい固有種が多く生息するオーストラリア。これらの動物についてのクイズでは、参加者の皆さんにオーストラリア・日本にかかわらず、野生動物保護や、AJWCEF の活動に興味を持って頂けたと思います。始めはまばらにしかいなかった参加者も徐々に増え、多くの人が積極的にクイズに参加してくださいました。クイズの答えを聞くと、あまり知られていないオーストラリアの珍しい固有種についてだけでなく、日本でよく知られている動物に関しても“知らなかった、へぇ、そうなんだ”のような驚きや関心の声も聞れました。一緒に発表してくれたコアラくん（左写真）も子供たちに大好評でした。発表の後も質問をしに来てくれる方もいらっしゃいました。100%以上の力を発揮でき、発表は大成功でした。

市民フォーラム

COP10生物多様性フェアーの一環として、AJWCEFの主催で10月24日（日）13：00～15：00にフォーラムが行われました。パネリストとして日本獣医生命科学大学の解剖学研究室教授である尼崎肇博士、環境学の専門家でオーストラリア全体や国立公園の生態系の管理などの研究をしているJosephine Kelman博士、有袋類の人工授精の専門家であるSteve Johnston博士、財団理事長である水野哲男の４人が講演いたしました。「ユーカリの森の生物多様性を守る挑戦—オーストラリアからのレポート—」というタイトルのもと、生物はなぜこんなにも多様化したのかという尼崎先生のお話から始まり、Johnston先生から種の保存及び遺伝子多様性の維持のためのオーストラリア野生動物（有袋類）における人工授精技術の応用、そしてKelman先生から野生動物たちの生息地であるユーカリの森における生態系の維持のためにどのような取り組み、研究がなされているのか興味深いお話があり、最後に水野理事長が生物多様性の維持のため財団の果たす役割について説明いたしました。

今回のフォーラムは予想以上に多くの方に参加して頂き、オーストラリアの自然環境や有袋類の人工授精の現状、コアラの生態など普段なかなか見ることや聞くことのできない話題に対して多くの方に興味を持って頂けたのではないかと思います。今回得られた皆様からの貴重なご意見を今後の財団の活動に生かしてまいります。

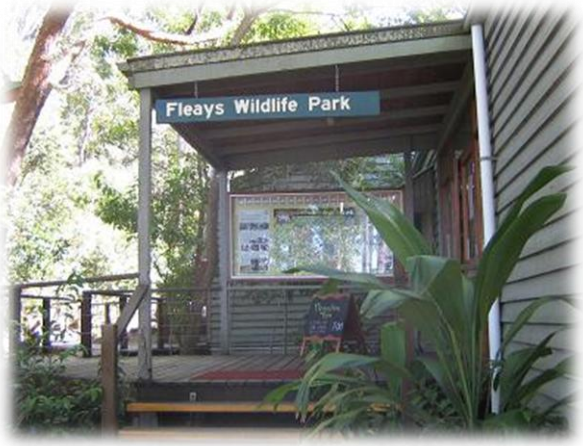
ロックワラビー

デービッド　フレー
野生動物公園

カソワリ

David Fleay Wildlife Park

AJWCEF の野生動物トレーニングコースの実習施設のひとつをご紹介しましょう。クイーンズランドのゴールドコーストの中心にありながら静寂な森に囲まれたここデービッド　フレー野生動物公園では、より自然に近い環境で多くのオーストラリアの固有動物を見ることが出来ます。この地域の野生動物から、自然ではほとんど見ることの出来ない絶滅危惧種までが収容されており、トレーニングコース中には実際にこれらの動物たちに触れその飼育管理を学びます。



デービッド　フレー野生動物公園は 1952 年にこの公園を開設した自然環境動物学者デービッド　フレー博士の偉業を今に引き継いでいます。この公園はデービッド　フレー博士が多くのクイーンズランドの固有の動物達の捕獲中の繁殖に世界で始めて成功した伝統を持ち、それらの動物を展示しています。公園内で繁殖に成功した動物達は、taipan (タイパン)、そして powerful owl (オニアオバズク), sooty owl (ススイロメンフクロウ), wedge-tail eagle (オナガイヌワシ)などの多くのフクロウや猛禽類などです。博士の功績により 1962 年にクイーンズランド野生動物保全学会が設立されました。

タウニーフロッグマウス

現在は、クイーンズランド州政府 環境資源局がここを環境教育施設として管理しています。この貴重な施設は、クイーンズランドの珍しい野生動物を皆様にご覧いただけるよう社会教育、環境保護観光、野生動物保護及び研究調査を併せて行っております。

この公園には病気、怪我をした、または孤児の野生動物たちの為の動物病院を併設しており、毎年、1500頭以上の野性動物が治療を受け、自然に帰されています。施設内は4つの異なった生息地域（湿地帯、雨林地帯、マングローブの森およびユーカリの森）に分けられ、動物達が展示されています。絶滅の危機にあり、内陸の砂漠地帯に生息する greater bilby (ミミナガバンディクート)、Mahogany glider (マホガニーフクロモモンガ)、Julia Creek dunnart (ジュリア クリーク フクロネズミ) などオーストラリアの非常に珍しい固有動物たちが展示されているこの公園の夜行性動物館には、ゴールドコーストではここでしか見られない platypus (カモノハシ) がいます。オーストラリアの珍しい哺乳動物、鳥類、爬虫類などについて学ぶのに最適です。

デービッド　フレー野生動物公園で見ることが出来るとても珍しい動物達は：

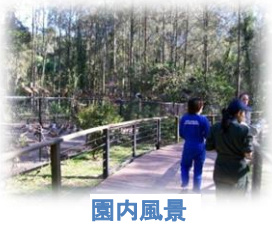
- カソワリ（絶滅危惧種）
- カモノハシ
- ラムホルツ木登りカンガルー（生息数の減少が懸念）
- マホガニーグライダー（絶滅危惧種）
- ジュリアクリークダナット（絶滅危惧種）
- グレータービルビー（絶滅危惧種）
- プロスパインロックワラビー（絶滅危惧種）
- コアラ
- ディンゴ
- 淡水及び塩水ワニ、各種の爬虫類など

この機会に皆さんもオーストラリアのユニークな動物たちについて学んでみませんか。

トレーニングコース実習

木登りカンガルー

ビルビー



園内風景

Moggill Koala Hospital のコーナー

No.2 命をつなぐユーカリ ～ラッドフォードの旅～

ここモギルコアラ病院には、毎日のように怪我や病気をしたコアラが運ばれてきます。しかし、全てのコアラが入院して元気に森に帰れる訳ではありません。運ばれて来た時点で、すでに生きる力もなく顔を伏せているコアラ、元気になると信じて看病しても回復できないコアラがたくさんいます。

ラッドフォードも力なく小さな生命を静かに呼吸するコアラの一頭でした。

犬の唾液のあと

ラッドフォードが犬に咬まれて運ばれて来たのはとても暑い日の午後でした。胴体の毛が犬の唾液でモコモコになって汚れてはいましたが、目立った外傷はありませんでした。とりあえず一晩は様子を見ることになり、床にいても届くようにユーカリをセッティングした ICU の小さなケージに運ばれました。診察の為に打たれた鎮静剤が効いて、ぐったりです。明日の朝には、とまり木に登ってユーカリを食べていてくれれば良いな…そう願って皆は病院を後にしました。

力が出ないよ…

翌朝、鎮静剤はとっくに切れているはずなのに、ラッドフォードは昨日サヨナラした時と全く同じ体勢でぐったりしているではありませんか！まさか！そんなことはない、そんなことはない！そーっと名前を呼びながら近づくと、ゆっくりと薄目を開けました。良かった…！少しだけ安心しました。でも、その衰弱ぶりはとても安心できたものではありません。当然、このまま入院させて良いのか、安楽死も視野にいれた会話がレンジャーや獣医師の間で始まりました。

そんな傍ら、小さな希望を胸にラッドフォードのケージを掃除するケアラーたち。手付かずになっている昨日のユーカリを口元に寄せると、ゆっくり目を開け、少し食べました。「食べてるよ！頑張ろうよ！」ケアラーの想いと、ラッドフォードの生きたいという姿勢におされて「じゃあ、もう一日様子をみよう！」という事になりました。
せっかくのチャンス、体力の回復が一番大切です。うなだれたラッドフォードの顔の前に少量ずつユーカリを置いて新芽を食べさせます。ラッドフォードのケージを見回る度に、死んだように動かないその姿にドキっとさせられました。このままでは、せっかく得たセカンドチャンスを活かせず、明日の朝もぐったりしているのではないか？そんな、どんよりした空気が流れていました。

しかし、翌朝のラッドフォードの目には心なしか、昨日よりも生きたいという意志が感じられました。相変わらず床でぐったりしてはいるものの、ひとりぼっちだった夜にも近くにあったユーカリを少し食べたようでした。こうして、この日もラッドフォードは命をつないだのです。

目から発せられる生命力は日に日に強くなっているように見えました。安楽死から一歩ずつ遠のいていく毎日。それでも、まったく木に登られないラッドフォードの森に帰る日までの道のりは、とてもとても長いのです。何故なら、木に登れないコアラは野生には戻れないからです。

レンジャーの補助のもと、少しだけ木に掴らせるリハビリのような事が始まりました。しかし、少しずつ食べることで体力を回復して来ていたように見えたある日、ラッドフォードはユーカリを一切食べなかったのです。皮下脂肪という蓄えが全くないコアラが食べないでいれば、一気に筋力を失います。口元に持っていっても全く興味を示しません。どうしよう…。
さらに悲しいことに、入院のストレスのせいか、軽い膀胱炎を発症してしまったのです！

お尻が汚れています！

一体どうしてラッドフォードは食べないのだろう…。食べたり、食べなかったり、私たちを心配させる日々が続きました。そして観察に観察を重ねたある日、次第にラッドフォードが食べるユーカリと食べられないユーカリがあることが分かってきたのです！

わがままと言ってしまえば、そうかも知れません。でも、コアラは親から譲り受けた腸内細菌や、育った地域、ユーカリの毒性の濃度によって食べるユーカリが違うのです。全く食べられない葉だけを与えることは、食料を何も与えていないのと同じ事です。ラッドフォードの場合は衰弱していた為それが顕著だったのかも知れません。

そうと分かれば、ラッドフォードの体力が回復するまで、リーフカッター（ユーカリを採集するレンジャー）と私たちケアラーの皆で力を合せてラッドフォードを甘やかす他ありません！誰がユーカリをあげる時も、ラッドフォードが食べられる柔らかいオレンジ色の新芽を持つ種類のブルーガム、赤い葉のスポッティというユーカリがいつも混ぜられているようにしました。ラッドフォードは他のコアラにも負けない驚くほどの食欲を見せ、新しいユーカリが入って来る時には、あの入院してきた当初のコアラとはとても思えないようなキラキラした瞳をして、一秒でも早くその美味しいユーカリを食べようと新芽を掴みます。

ようやく自力で木に登り降り出来るようになり、、一日中コアラらしく木の上で生活できるようになって来ました。良かった…これでまた一歩、自由の世界に近づいた！後は、膀胱炎が悪化しないことです。

少し登れるようになりました。

ICU にある小さなケージから、膀胱炎の病棟に引越しした時は、みんな複雑な気持ちでした。ICU を出た事は本当に嬉しいことでしたが、疑いなく膀胱炎だという事が告げられたようで悲しかったのです。

膀胱炎の治療中

膀胱炎で１年近く入院するケースは稀ではありません。ストレスによって症状が悪化するケースもよくあります。ストレスを与えないように速やかにミルクや薬をあげ、総排泄腔を消毒してあげる事がとても重要になります。そして何より、大好きなユーカリを食べている時の、あのイキイキした幸せそうな目を持ち続けることが、免疫力向上に最も大切です！

私たちの努力とラッドフォードの生きたいという願いはついに実りました！
「明日の朝は息絶えているかも知れない…」そんなところから始まったラッドフォードの生命の旅は大自然という明るい出口へと開いて行きました！
これからは、自力で元気の源になるユーカリを見つけないとなりません。でも、体力を回復したラッドフォードです、きっと出来るでしょう。しっかり自由を満喫して、近い将来には大きなパパコアラになっていますように…と願いをこめて送り出しました。

今日、森に帰るよ！

AJWCEF ユーカリ植林プロジェクト

土地開発によるユーカリの森の減少は、野生コアラの食糧や住処を圧迫する大きな問題であり、また、コアラ病院の入院患者にとっても大きな問題です。なぜなら、最高品質のユーカリが傷ついたコアラの回復に不可欠にもかかわらず、コアラが食べる新芽が多く付いた新鮮なユーカリを採集する事が、とても難しくなって来ているからです。入院コアラの為のプランテーションの充実が必要になってきています。

この問題の改善に向けて、AJWCEF ではトレーニングコースやスタディツアーの参加者と地域の皆さんと協力し植林活動を行っています。

地元公立学校などの協力を得て、学校の敷地を植林の為に活用し、地元の生徒と日本からの参加者とで交流を深めながら自然環境の保護と他の生物との共存について考える機会を設けています。この活動は、参加者全てにとってプラスになっており、地元の新聞や雑誌記事にも取りあげられました。

地元紙　クーリエメイル
2010 年 11 月 30 日

文・写真平野聡美

2010 年 8 月トレーニングコース（上級）レポート

日本獣医生命科学大学
野生動物学教室 3 年　丸山　楓

様々な野生動物の保護施設を見学させて頂き、そこで働くレンジャー、獣医師、ボランティアの方々の話を聴く中で、オーストラリアでは「生態系を見据えた自然保護」という共通の認識があることに驚きました。野生動物が保護されてきたら、まず「野生に帰せるのか？生きていけるのか？繁殖できるのか？」生態系の一員として機能できるかが考えられます。そこで、安楽死の判断となることもありますが、政府の指針に基づきストレスや長期に渡る治療の苦痛、生態系のバランス等がよく協議され判断されていました。野生動物保護を考える上で安楽死や永久飼育などの問題はとても難しいことです。私の中でも、ずっと答えの出ない問でもあります。正解はわかりませんが、オーストラリアに来てこのような生態系という大きな視点をもった野生動物保護の考え方もあるのかと感じたことが強く印象に残っています。その中で、１頭でも多く自然で生きてゆけるように、レンジャーや獣医師、ボランティアの存在が本当に心強いものでした。

今、日本でも野生動物との付き合い方を真剣に考えなければいけない時期にきています。オーストラリアで多くの方から教えていただいた野生動物保護の意味、またその難しさを日本の多くの人に伝え、考えてもらえるよう、これから AJWCEF のボランティアとして協力してゆけたらと思います。

バイオ技術者　S. I.

私は日本でリハビリテーター活動を行っており、海外のしかも有袋類というオーストラリア固有種を相手にするのは、未知の分野に手を突っ込む事と同じでした。しかし、動物種も保護への取り組みも『違う』ことを知るのは大事だと思い、このセミナーに申し込みました。

結果、予想を上回る濃い実施内容と水野先生はじめスタッフのサポートをいただき、充実した日々を送ることができました。何より、テレビや図鑑、動物園でも遠くに眺めることしかできなかった動物を、間近に見て触れることができる。百聞は一見に如かずの言葉通り、それが何よりの勉強になりました。

モギルコアラ病院では、収容されているコアラの飼育、疾病のケアについて。デイジーヒルでは、放野されたコアラのトラッキング体験。市街地の真ん中でラジオ・テレメトリーを行うのは、コアラの特性・オーストラリアの野生動物生息地の現状が現されているように感じました。

さらに、クィーンズランド州内の野生動物保護の取り組みについての講義。オーストラリア国内の野生動物の危機的状況は、日本では知らないことばかりでした。ただ、政府･民間それぞれの保護活動について、多岐に渡って行われているように思われます。それでも、「十分とはいえない」という、意見を聞きましたが、正直羨ましく感じます。これを日本で真似できるだろうかと考えると、少々目の前が暗くなったりもしました。

飼育実習は、モギルの他にデイビット・フレイ野生動物公園で、3 日間行われ、カモノハシ、ディンゴをはじめオーストラリア固有で希少な動物達を世話する事ができました。生態に合わせた給餌、一定敷地内で飼育する上での注意点や動物を飽きさせない工夫。木登りカンガルーの「クラッキング+タッチ」。松ぼっくりや穴あきブロックにアボカドを埋めて与え、わざと簡単に食べられないようにする。

大きな仕掛けではなく身近な物で動物達の生活に変化をもたらしていました。展示ではなくとも、終生飼育となる動物を世話するとき、こうしたアイディアを上手く使えたら…と、目に焼き付けてきました。

体験だけでなく、いただいた資料や講義で聞いた事から、保護の取り組みは特別な研究機関・ボランティア・政府が連絡を取りあって共同し行っていく必要性を強く感じました。それを目指していくには、ひたむきで地道な活動、広い視野を持ち、長く続けていける行動力が必要なのではないかと考えます。

日本でも、野生動物の生息環境は悪化し、ヒトと関わる問題が目立ってきています。そのニュースを知るたびに焦る気持ちもありますが、すぐにできることは、今回の学習で見聞きし体験したことを自分の中で消化し、他の方へと伝えていくこと。そして現場で見た色々な工夫を、日本の野生動物へ還元できるよう活動していきたいと思います。

この他の参加者の体験談も AJWCEF のホームページに掲載されます。是非そちらの方もご覧下さい。

２０１０年度活動報告

2009 年 12 月から 2010 年 11 月まで

学術発表

1. 第 149 回日本獣医学会学術集会 (2010 年 3 月)
2. COP10 本会議サイドイベント (2010 年 10 月)

大学向け野生動物保護セミナー、シンポジューム開催

1. 日本獣医生命科学大学 (3 回：2010 年 3 月, 6 月, 10 月)
2. 岡山理科大学 (1 回：2010 年 3 月)
3. 麻布大学 (2 回：2010 年 6 月, 11 月)
4. 北里大学 (1 回：2010 年 11 月)
5. 岐阜大学 (1 回：2010 年 10 月)

一般向け野生動物保護セミナー、シンポジューム開催

1. 第 31 回日豪合同セミナー (2010 年 6 月)
2. COP10 生物多様性交流フェアー市民フォーラム (2010 年 10 月)

メディア

1. “グッと地球便”読売テレビ (2010 年 9 月)
2. “もっと知りたい生物多様性”NHK ラジオ (2010 年 10 月)
3. “日本にいるコアラの近親交配問題と国際的人工授精ネットワーク構想”
   日本経済新聞 (2010 年 10 月)
4. “日本にいるコアラの近親交配問題と国際的人工授精ネットワーク構想”
   中日新聞 (2010 年 10 月)
5. “レンタルコアラ”名古屋テレビ (2010 年 10 月)
6. “ただいま勤務中！森谷猛夫のお世話になります”ＫＢＳ京都ラジオ（2010 年 10 月）
7. “京プラス”KBS 京都（2010 年 10 月）
8. “CBC ニュース、コアラ特番”CBC テレビ (2010 年 11 月)

野生動物保護トレーニングコース

1. 初級トレーニングコース (2010 年 3 月)
2. 上級トレーニングコース (2010 年 8 月)
3. 初級トレーニングコース (2010 年 9 月)

野生動物保護スタディーツアー (定員 40 名)

1. 日本獣医生命科学大学 (2010 年 8 月)

事業

1. ユーカリ植林事業
   (モギルコアラ病院、プレンベイル小学校、AJWCEF での共同事業、2010 年 8 月)
2. オーストラリア固有動物国際的人工授精ネットワーク
   (日本動物園水族館協会、多摩動物園、東山動物園と協議開始、2010 年 10 月)
3. オーストラリア日本研究交流事業
   (クイーンズランド大学、日本獣医生命科学大学、モギルコアラ病院、デービッドフレー野生動物公園など)

寄付 (2010 年度)

1. イプスイッチ　コアラ保護協会：$249
2. デイジーヒル　コアラセンター：$500
3. モギルコアラ病院：$400
4. カランビン野生動物公園：$700

AJWCEF2010年度会計報告をご覧になりたい方は、サイト内『財団について』のページにて、
3 月後半よりご覧になれます。

イベント情報

《トレーニングコース》

（変更の可能性あり　ホームページでご確認下さい）

① **2011年3月13日（日）～3月27日（日）**募集は終了致しました。
オーストラリア野生動物保護トレーニングコース（初級）
開催地 オーストラリア クイーンズランド州

② **2011年7月31日（日）～8月14日（日）予定**
オーストラリア野生動物保護トレーニングコース（上級）
開催地 オーストラリア クイーンズランド州

③ **2011 年 9 月 4 日（日）～9 月 18 日（日）予定**
オーストラリア野生動物保護トレーニングコース（初級）
開催地 オーストラリア クイーンズランド州

ＡＪＷＣＥＦスタッフ紹介

山口　真澄（2010 年 3 月初級トレーニングコース参加）

はじめまして。AJWCEF 広報ボランティアの山口真澄です。財団主催のトレーニングコースへの参加がきっかけで、ボランティアとして財団に関わらせて頂くことになりました。野生動物の保護や繁殖に興味があり、今回のトレーニングコースでオーストラリアやその大地に暮らす動物たちをもっと知りたい、そしてその現状を多くの人に知ってもらいたいと考えるようになりました。それがオーストラリアだけでなく世界中の生物の保護に繋がることを願いながら頑張っていきたいと思います。よろしくお願いします。

武田　智子（2010 年 3 月初級トレーニングコース参加）

トレーニングコースへの初「社会人」参加者にして初「社会人」ボランティア。神奈川野生動物救護の会のボランティアや、災害救助活動（災害地へ浄水の供給を行う）社内ボランティア等も行っている。大学では工学系専攻だったため動物の知識は乏しいが、英語面やデータ解析等で貢献するつもり。二足の草鞋ならぬ「ムカデの草鞋」がモットー。

河口　貴恵（2010 年初級 3 月トレーニングコース参加）

私が財団に出会ったのは、２０１０年３月のトレーニングコース（初級）への参加がきっかけでした。 大学で獣医学を学んでいるうちに、ペットのための獣医療は「まち」にこれだけ溢れているのになぜもっと、絶滅の危機に瀕している動物たち、それも人間の活動によってそういった危機に直面している動物たちのための獣医療は行き届いていないのだろうという疑問が湧いてきていました。
初めは、オーストラリアの異文化にも触れられるという軽い気持ちで参加したトレーニングコースでしたが、毎日の実習を通して野生動物への考え方が少しずつ変わってきました。 日常では考えること、知ることすらできなかったことを教えて下さった方々に深く感謝しています。

奥野　里美（COP10 ボランティア参加）

社会人広報ボランティアとして参加しています。小さい頃から生物なんでも大好きでいつか野生動物保護活動にかかわってみたいと思っていました。AJWCEF の素敵なスタッフにかこまれながら何か自分にできることはないかと模索しながら活動しています。今後さらに多くの方と一緒に活動できればと思っています。

会員 (個人・法人) 募集 及び 支援寄附のお願い

皆さまのご支援が小さな命を助けます

詳細は、AJWCEFのサイトwww.ajwcef.orgで『参加・協力』のページにお進みください。

ニューズレター発行元
オーストラリア野生動物保護教育財団本部事務局

発行責任者　水野哲男
編集担当　平野聡美
ホームページwww.ajwcef.org
住所　PO Box 1362 KENMORE,
QUEENSLAND, 4069, AUSTRALIA
電話　+61 7 3374-3909　FAX　+61 7 3374-3531